

地域看護学実習終了時における学生の地域保健活動への 関心度とその関連要因

トミタ サナエ ヨコヤマ ヨシエ
富田 早苗* 横山 美江^{2*}

目的 本研究では、地域看護学実習終了時における学生の地域保健活動への関心の程度（関心度）とその関連要因を明らかにし、より効果的な実習を行うための基礎的資料とすることを目的とした。

方法 対象者は、A県内の看護系大学で、平成17年4月～7月に地域看護学実習を実施した2校に在籍する133人の4回生（年生）である。地域看護学実習終了時に調査を実施し、郵送にて回収した。調査内容は、学生の基本情報と地域保健活動への関心度、実習施設や実習経験、現場保健師の実習指導と教員との連携等である。学生の地域保健活動に関する関心度については、意味的差分法（SD法）を用いて測定し、得点化（関心度得点）した。統計学的分析方法については、質的変数の独立性の検定には χ^2 検定を、地域保健活動に関する関心度得点における2群間の比較にはMann-WhitneyU検定を、多群間の比較にはKruskal-Wallis検定を用いた。

結果 編入生を除く有効回答者は78人（有効回答率58.6%）であった。入学前に希望していた職種は保健師15.4%、助産師7.7%、看護師64.1%、わからない12.8%であった。本調査結果から、講義・演習をとおして保健師に興味をもった学生、ならびに実習をとおして保健師に興味をもった学生は、実習終了時の地域保健活動への関心度得点が有意に高かった。また、現場保健師の実習指導では、学生の気づきを大切にされた指導、具体的でわかりやすい説明、学生が困っているときの声かけ、および現場保健師による学生への過度な期待がなかった場合に地域保健活動への関心度得点が有意に高かった。

結論 本研究結果より、大学の講義・演習あるいは実習経験により保健師に興味をもった学生は地域保健活動への関心度得点が高く、さらに、現場保健師による4つの実習指導手法が学生の地域保健活動への関心度を高めることが明らかとなった。今後、学生の地域保健活動への関心度を高めるような講義・演習内容の検討、ならびに実習指導の充実が望まれる。

Key words：地域看護学実習，保健師，実習指導，学生の関心

Ⅰ 緒 言

平成6年に30校であった看護系大学は、平成17年には129校と、この10年間で看護系大学の数は約4倍に増え^{1,2)}、それに伴い保健師教育も大学教育が主流となってきている^{3~5)}。多くの大学では、保健師学校養成所の指定基準と看護師学校養成所の指定基準の2つの教育課程を統合したカリキュラムにより教育が行われている。しかし、大学における地域看護学教育の内容や時間数が不十分であるとも指摘されており^{4,5)}、講義・演習・実習等の科目の内容

および進度に関する問題、実習施設の確保・実習指導者の資質に関する問題、学生への動機づけが薄い等、保健師教育の問題を感じている大学は約8割にも上っている^{4~6)}。

保健所や市町村を実習施設としている地域看護学実習では、3単位という実習時間の中で、教員による指導は数回程度と限られている場合が多く⁷⁾、実習施設の保健師（以下、現場保健師とする）が実習指導の中心的な役割を担っていることが少なくない。臨地実習は看護を学ぶ学生にとって、現場を知ることのできる貴重な学習経験の場である。看護系大学における保健師教育において、効果的な地域看護学実習を行うことは急務の課題であるといえる。看護系大学の地域看護学実習における研究では、各大学における教員と学生による相互の評価に関する

* 岡山県立大学保健福祉学部看護学科

^{2*} 大坂市立大学医学部看護学科

連絡先：〒719-1197 岡山県総社市窪木111

岡山県立大学保健福祉学部看護学科 富田早苗

研究や⁷⁻⁹⁾、現場保健師を対象とした地域看護学教育に関する研究¹⁰⁾、地区診断等具体的な実習内容の評価に関する研究等も行われているが^{11,12)}、看護学生を評価主体とした地域看護学実習の効果に関する研究はまだ着手されていない^{13,14)}。病院での実習指導に関する研究では、実習指導の効果に関心度が多く使用されており^{15,16)}、また知識や理解、技能といった学力を伸ばすためにも関心といった情意的基盤は不可欠である¹⁷⁾。

そこで本研究では、地域看護学実習終了時における学生の地域保健活動への関心の程度（関心度）とその関連要因を明らかにし、より効果的な実習を行うための基礎的資料とすることを目的とした。

II 研究方法

1. 対象

本研究の対象者は、A県内の看護系大学で前期（4月～7月）に地域看護学実習を実施している3校のうち、文書にて研究の主旨説明に同意の得られた2校に在籍する4回生（年生）133人（このうち、3回生から編入している学生は11人）である。A県内のみの看護系大学を対象とした理由は、地域看護学実習の実習場が県内の保健所および管轄の市町村で、県の保健行政内容が類似しており、かつ実習指導に従事する現場保健師の研修を同一県が実施していることが主な理由である。とくに県が実施している研修では、大学の地域看護学実習の目的を理解することや、その目標とする実習内容を体験させることが困難な場合の工夫（事例検討用の資料を作成する等）も現場保健師間で協議されており資質の向上が図られている。

2校とも3週間におよぶ地域看護学実習（以下、実習とする）を、県保健所1週間、市町村2週間の合わせて3週間か、政令市保健所のみで3週間かのどちらかで行っている。3週間の実習の内、初日と最終日は学内のオリエンテーションとまとめが行われており、1校はさらに中間においても学内演習が行われている。また、2校とも学生を数人グループによる編成で4月～7月の間に4つの実習期間に分けて3週間ずつ実習を行うという形態をとっており、各実習期間の時期により、学生の小児・母性・成人等の他の実習科目（以下、他分野とする）での実習経験が異なるという特徴をもつ。調査は、平成17年4月～7月で、実習最終日の学内まとめ時に実施した。

分析については、2校とも4回生の前期に地域看護学実習を行っており、各実習期間によって他分野の実習経験が異なる等共通点も多いことから、2校

併せて対象者の分析を行った。

2. 倫理的配慮

対象者には研究の主旨を文書にて説明し、研究参加の同意を得た。文書では、調査の目的、対象者のプライバシーと匿名性は厳守されること、調査結果を研究目的以外に使用しないこと、答えたくない質問には答えなくてもよいことを説明した。同意の得られた者のみ郵送にて回収した。

なお、本研究は、岡山大学の看護学専攻倫理審査委員会の承認を得て実施した。

3. 調査内容

調査内容は、年齢、性別等学生の基本情報と、入学前に希望していた職種、講義・演習ならびに実習をとおしての保健師への興味、地域看護学実習前に経験した他分野の実習内容、実習施設、地域看護学実習の経験内容、現場保健師の実習指導、教員と現場保健師の連携と一貫性について調査するとともに、地域保健活動への関心度について調査した。なお、地域看護学実習の経験内容では見学実習も含めて実施した場合は経験ありとした。

学生の地域保健活動に関する関心度については意味的差分法（semantic differential method, 以下、SD法とする）を用いた¹⁸⁾。SD法は図式評定尺度（graphic rating scale）である。図式評定尺度では、回答者はある事柄（関心度）についての判断を一つの線を用いた尺度上の段階で答えてもらうよう求め、関心度の特性の一方の最極端から他方の最極端までを段階的に表した一つの線上で、もっとも適当と思われる点にチェックをつけてもらうようにした。この尺度は関心なし～関心ありといった正反対になる形容詞で構成した。回答の採点の仕方は、7段階尺度で測定し、1～7点と得点化（以下、地域保健活動への関心度得点）した。関心なしであればより低い得点（1点）を、関心ありであればより高い得点（7点）となる。

講義・演習をとおしての保健師への興味、現場保健師の実習指導、教員と現場保健師の連携および一貫性、実習をとおしての保健師への興味については、5段階評定（非常にそう思う、わりにそう思う、どちらともいえない、あまり思わない、全く思わない）にて調査し、非常にそう思う、わりにそう思うを「思う」とし、どちらともいえない～全く思わないを「思わない」とした。

4. 分析方法

統計学的分析方法には、質的変数の独立性の検定には χ^2 検定を、地域保健活動に関する関心度得点の2群間の比較にはMann-WhitneyU検定を、多群間の比較にはKruskal-Wallis検定を用いた。統計解

析は、SPSS Vol 13.0J for Windows を使用した。

III 結 果

1. 対象者および実習の概要

質問紙を送付した2校に在籍する4回生133人中、本研究への参加に同意し、回答した者は87人であった。87人の内編入生は6人で、その内5人が地域看護学実習を経験しており、またレギュラー生(1回生から4回生へと進学している学生)と比較し保健師希望が多かったこと、分析するには少数であったことから対象から除外した。また、地域保健活動への関心度の回答が不明であった3人を除き、有効回答数78人(有効回答率58.6%)を本研究の分析対象者とした。

回答者78人の性別は全員女性で、年齢は平均21.92±3.23歳(mean±SD)であった。学生が大学入学前に希望していた職種は、保健師12人(15.4%)、助産師6人(7.7%)、看護師50人(64.1%)、わからない10人(12.8%)であった。

地域看護学実習の前に経験していた他分野の実習では、小児看護学実習および老年看護学実習は学生全員が経験しており、母性看護学実習を経験していた学生は82.1%、成人看護学実習は80.8%、精神看護学実習は79.5%、在宅看護論実習は60.3%であった。地域看護学の実習施設は、政令市保健所が32人(41.6%)、県保健所と市町村が45人(58.4%)であった。実習で経験した対人保健サービスの内容は、家庭訪問76人(97.4%)、健康教育77人(98.7%)、健康診査69人(88.5%)、ならびに健康相談53人(67.9%)であった。また、経験した対象の領域は、母子78人(100.0%)、老人69人(88.5%)、精神61人(78.2%)、難病16人(20.5%)、感染症10人(12.8%)、および学校保健6人(7.7%)であった。

表1は、実習施設による対人保健サービスの経験

表1 実習施設による対人保健サービスの経験の比較

項 目	政令市保健所 N (%)	県保健所と 市町村 N (%)	検定
対人保健サービスの経験 (家庭訪問, 健康教育, 健康診査, 健康相談)			
4種類以上の経験	27(84.4)	22(48.9)	**
3種類以下の経験	5(15.6)	23(51.1)	
対象の領域(母子, 老人, 精神, 難病, 感染症, 学校)			
4領域以上の経験	6(18.8)	13(28.9)	n.s.
3領域以下の経験	26(81.2)	32(71.1)	

検定は Fisher の直接確率法による検定を用いた。

** P<0.01 n.s. : not significant

について比較したものである。政令市保健所における実習は、県保健所と市町村の実習よりも4種類以上の対人保健サービスを経験している者が有意(P<0.01)に多かった。しかし、母子等対象の領域に関しては実習施設による差は認められなかった。

2. 実習終了時における地域保健活動への関心度

図1は、実習終了時の地域保健活動への関心度得点の回答分布である。関心なしであればより低い得点で、関心ありであればより高い得点となる。関心度得点の平均値は5.55±1.38点であった。

表2は、実習終了時における学生の地域保健活動への関心度得点について示したものである。入学前に希望していた職種では、保健師、助産師および看護師を希望していた学生との間で地域保健活動への関心度得点に有意な差は認められなかった。講義・演習をとおしての保健師への興味に関しては、講義・演習後興味をもった学生はそう思わなかった学生に比べ有意(P<0.05)に地域保健活動への関心度得点が高かった。また、実習をとおして保健師に興味をもった学生は、そう思わない学生に比べ有意(P<0.001)に地域保健活動への関心度得点が高かった。実習前の他分野の実習経験、実習施設、対人保健サービスの実習経験の3項目では地域保健活動への関心度得点に有意な差は認められなかった。

3. 現場保健師および教員の实習指導と地域保健活動への関心度

表3は、実習終了時の現場保健師および教員の实習指導状況と地域保健活動への関心度得点の関連について示したものである。現場保健師の実習指導では、学生の気づきを大切にした指導、具体的でわかりやすい説明、学生が困っているときの声かけに関して、あったと思う学生はそう思わない学生に比べ有意(P<0.01, P<0.05)に地域保健活動への関心

図1 関心度得点の回答分布

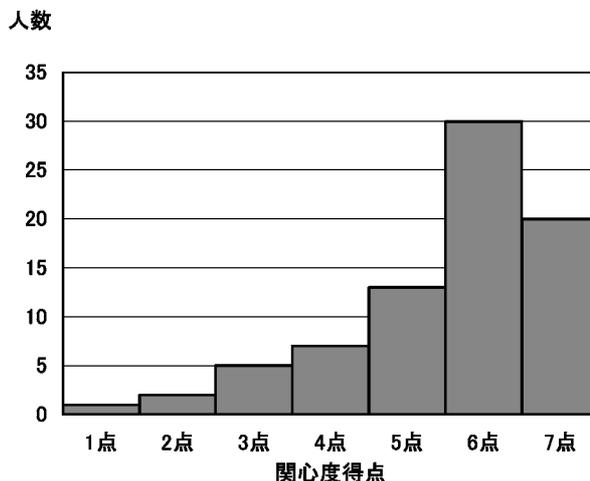


表2 実習終了時の地域保健活動への関心度得点

項目	N=78	関心度 得点 Mean±SD	関心度 得点 中央値	検定
入学前に希望していた職種 ¹⁾ a)				
保健師	12	5.75±1.49	6.00	n.s.
助産師	6	4.83±1.84	5.00	
看護師	50	5.48±1.36	6.00	
講義・演習をとおしての保健師への興味の高まり				
思う	32	6.03±1.03	6.00	*
思わない	46	5.22±1.50	6.00	
実習前の他分野の実習経験				
母性看護学実習				
あり	64	5.56±1.37	6.00	n.s.
なし	14	5.50±1.51	6.00	
成人看護学実習				
あり	63	5.56±1.42	6.00	n.s.
なし	15	5.53±1.25	6.00	
精神看護学実習				
あり	62	5.52±1.38	6.00	n.s.
なし	16	5.69±1.45	6.00	
在宅看護論実習				
あり	47	5.51±1.33	6.00	n.s.
なし	31	5.61±1.48	6.00	
実習施設 ¹⁾				
政令市保健所	32	5.78±1.24	6.00	n.s.
県保健所と市町村	45	5.47±1.39	6.00	
対人保健サービスの経験 (家庭訪問, 健康教育, 健康診査, 健康相談)				
4種類以上の経験	49	5.57±1.34	6.00	n.s.
3種類以下の経験	29	5.52±1.48	6.00	
対象の領域(母子, 老人, 精神, 難病, 感染症, 学校)				
4領域以上の経験	19	5.89±1.10	6.00	n.s.
3領域以下の経験	59	5.44±1.45	6.00	
実習をとおしての保健師への興味の高まり				
思う	72	5.74±1.23	6.00	***
思わない	6	3.33±1.21	3.50	

¹⁾ 不明の者は除外した
検定は^{a)} Kruskal-Wallis 検定を, 他は Mann-Whitney U 検定を用いた。

* $P<0.05$ *** $P<0.001$ n.s.: not significant

度得点が高かった。また, 現場保健師による過度な期待がなかったと思う学生はそう思わない学生に比べ有意 ($P<0.01$) に地域保健活動への関心度得点が高かった。なお, 教員と現場保健師の連携がよくとれていたと思う学生は39.7%, とれていなかったと思う学生は60.3%であった。教員と現場保健師の指導に一貫性があったと思う学生は53.2%, そう思わない学生は46.8%であった。地域保健活動への関心度得点については, 教員と現場保健師の連携および指導の一貫性の2項目では差は認められなかった。

IV 考 察

平成3年頃まで保健師の養成は, 看護師の国家試験受験資格を得た後に, 保健師の国家試験に必要な

表3 現場保健師および教員の実習指導と地域保健活動への関心度得点

項目	N=78	関心度得点 Mean±SD	関心度得点 中央値	検定
保健師の実習指導				
事業実施前の説明				
思う	62	5.63±1.33	6.00	n.s.
思わない	16	5.25±1.57	5.00	
学生の実習経験を考慮した指導 ¹⁾				
思う	61	5.59±1.33	6.00	n.s.
思わない	15	5.27±1.62	5.00	
学生の気づきを大切にされた指導 ¹⁾				
思う	66	5.73±1.26	6.00	**
思わない	11	4.36±1.57	4.00	
具体的でわかりやすい説明 ¹⁾				
思う	70	5.64±1.32	6.00	*
思わない	6	4.17±1.60	4.00	
学生の興味に合わせた実習の配慮 ¹⁾				
思う	69	5.59±1.33	6.00	n.s.
思わない	7	4.86±1.86	6.00	
学生が困っているときの声かけ ¹⁾				
思う	60	5.75±1.20	6.00	*
思わない	17	4.76±1.72	4.00	
保健師への質問のしやすさ ¹⁾				
思う	63	5.67±1.31	6.00	n.s.
思わない	14	4.93±1.59	5.00	
保健師による過度な期待がない ¹⁾				
思う	40	5.93±1.29	6.00	**
思わない	37	5.11±1.37	5.00	
教育と現場の活動が結びつく指導 ¹⁾				
思う	43	5.58±1.35	6.00	n.s.
思わない	34	5.47±1.44	6.00	
住民への態度からの学び ¹⁾				
思う	72	5.58±1.35	6.00	n.s.
思わない	5	4.80±1.79	6.00	
教員と保健師の連携と一貫性				
教員と保健師の連携				
思う	31	5.74±1.34	6.00	n.s.
思わない	47	5.43±1.41	6.00	
教員と保健師の指導の一貫性 ¹⁾				
思う	41	5.66±1.35	6.00	n.s.
思わない	36	5.39±1.42	6.00	

¹⁾ 不明の者は除外した
検定は Mann-Whitney U 検定を用いた。

* $P<0.05$ ** $P<0.01$ n.s.: not significant

科目を履修し受験資格を得るという教育課程が標準的であった。その後, 大学設置基準の改正, 平成8年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正による保健師・看護師統合カリキュラムの導入等, 社会の看護に対する期待の大きさも相まって大学での保健師の養成が激増した¹⁹⁾。平野らの⁵⁾, 保健師養成所の指定規則を満たす看護系大学, 短大専攻科, 専修学校の学生を対象とした2001年における卒業前年の10月~11月に実施した調査によると, 卒後

に保健師を希望する者は看護系大学では21.1%，短大66.3%，専修学校61.1%であった。また、保健師を希望するようになったきっかけは、短大や専修学校では70%ないし80%の学生が入学前から動機づけされているのに対して、大学では半数以上が入学後に実習によって動機づけられていたと報告している⁵⁾。本調査では、地域看護学実習後の保健師希望に関する調査は実施しなかったためその割合は不明であるが、大学の講義や演習をとおして地域で働く保健師に興味をもった学生は約4割で、実習終了時に保健師に興味をもった学生は約9割と、保健師に対して興味をもった学生は実習により2倍以上に増加していた。

実習終了時の地域保健活動への関心度得点では、入学前に希望していた職種との関連は認められなかったものの、講義・演習をとおして保健師に興味をもった学生はそうでない学生に比べ有意に地域保健活動への関心度得点が高く、講義・演習の重要性が改めて明らかとなった。大学では4年間という期間で看護師と保健師の国家試験受験資格が得られるが、保健師としての能力育成のための十分な教育時間が取れない、系統的な教育が難しい等の問題点を抱えているとの報告もあり^{3~6)}、より効果的な講義・演習ならびに実習の組み立てを検討する必要がある。

調査した2校はどちらも4回生の前期に地域看護学実習を行っており、グループによって他分野の実習進捗が異なっていた。他分野で多くの経験をした後に地域看護学実習を行った方がより地域保健活動への関心度得点が高いと予測していたが、今回の調査では差は認められなかった。2校とも地域看護学実習を実習全体の中でも後半に設定していたこと等により差が認められなかったとも考えられる。どの時期に地域看護学実習を行うことがよいかに関しては、様々な時期に地域看護学実習を設定している他大学に対して調査を実施し、その効果を比較・検討していく必要がある。

また、政令市保健所では県保健所と市町村の実習に比べ家庭訪問等対人保健サービスの実習経験が有意に多かったが、実習施設による地域保健活動への関心度得点には差がなかった。本調査における実習施設では、対人保健サービスの実習経験の少なかった学生に対して、現場保健師が作成した事例検討用の資料を用いる等の実習方法の工夫がなされていた。この工夫により実習経験の量を補っていたとも考えられる。すなわち、学生の地域保健活動への関心については、実習施設による経験の量だけでなく、現場保健師の指導内容が影響しているとも考え

られる。いずれにしても、対象者が78人と少なかったため、今後対象者数を増やしさらに調査をする必要がある。

一方、現場保健師の実習指導手法と学生の地域保健活動への関心度得点の関連をみると、学生の気づきを大切にされた指導、具体的でわかりやすい説明、学生が困っているときの声かけがある場合、地域保健活動への関心度得点は有意に高かった。このことは、各大学の教育カリキュラムを理解した上で実習指導をすること、日々の地域保健活動を具体的に説明する能力を養うこと、学生へのきめ細かい声かけ等により実習しやすい環境を整えることが現場保健師に求められているといえよう。

また、学生への過度な期待がない場合、地域保健活動への関心度得点が有意に高かった。このことは、現場保健師が学生に過度な期待をしすぎるとかえって学生の地域保健活動への関心を低下させてしまう可能性があることを示している。教育成果について最大限の期待を示すものを「期待目標」といい、現実すべての学生が最低限到達すべきものを「到達目標」という¹⁷⁾。地域看護学実習開始前の学生のレディネスはどこまでか、実習終了時の到達目標はどこかが現場で理解されていないと、学生に過度な期待をかけてしまうことにもなりかねない。

一方、本調査において、実習指導の中で現場保健師と教員の連携がよくとれていたと思う学生は約4割、指導が一貫していたと思う学生は約5割にすぎず、半数近くの学生が現場保健師と教員の連携や指導の一貫性が十分ではないと答えていた。また、全国の大学や実習施設を対象とした調査では、家庭訪問の技術、健康教育の技術等の卒業到達レベルは、大学側の認識しているレベルよりも現場保健師が期待するレベルの方が高い傾向にあったとの報告もある²⁰⁾。近年、生活習慣病予防や介護予防、健康危機管理等、社会的ニーズとして保健師の資質向上が求められている中、大学での保健師教育の充実も急務とされている。現状でのカリキュラムでは、教育できる内容と時間数は限られており、現場保健師の期待するレベルと学生の到達目標に差が生じやすい状況にあったと推察される。平成19年4月に報告された保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正案においても地域看護学実習のさらなる充実が求められている。これらのことから、再度実習終了時の到達目標が大学側と現場保健師とで十分に協議され、学生の到達目標を大学側と現場保健師の双方で共通認識する必要がある。その上で、学生の学習意欲が高まるような指導が現場保健師にも求められているといえる。

本研究では、A県内に対象校を絞っていたこともあり、対象者数が少なく、かつ調査に協力した学生は、地域看護学実習終了時点ということもあり、地域保健活動に興味があるため記載した可能性もある。加えて、地域保健活動に関心度という情意的領域の1項目のみの結果変数でしか評価していないため、地域看護学実習の効果を検討するには限界がある。今後は、知識の習得や理解等の認知的領域や、技術等の習得を含めた到達性について評価尺度の検討も含め、さらに研究をすすめていく必要がある。実習進度や実習内容等を含めた効果的な実習プログラムの検討については、実習進度や実習内容が異なる他大学との比較検討が必要であり、より効果的な地域看護学実習のプログラム開発のために大規模な共同研究の企画推進が望まれる。

V 結 語

講義・演習あるいは実習経験により保健師に興味をもった学生は地域保健活動への関心度得点が有意に高かった。さらに、現場保健師による実習指導の4つの手法、すなわち学生の気づきを大切にされた指導、具体的でわかりやすい説明、学生が困っているときの声かけ、学生に過度な期待をしすぎない指導が学生の地域保健活動への関心度を高めることが明らかとなった。

本研究にご協力をいただきました大学の皆様に深謝申し上げます。

(受付 2006. 3.30)
(採用 2007.12.15)

文 献

- 1) 日本看護協会出版会, 編. 看護関係統計資料集. 東京: 日本看護協会出版会, 2004; 109-193.
- 2) 日本看護協会出版会, 編. 看護関係統計資料集. 東京: 日本看護協会出版会, 2006; 64.
- 3) 金川克子, 平井恵理. 地域看護学教育の視点—保健師教育を中心に—. 北陸公衆衛生学会誌 2002; 29: 1-6.
- 4) 金川克子. 調査報告から見えてくる「いまどき」の地域看護学教育. 保健婦雑誌 2003; 59: 1116-1120.
- 5) 平野かよ子, 池田信子, 金川克子, 他. 看護系大学, 短大専攻科, 専修学校の保健師養成について—教員と学生の保健師活動の認識等の実態調査—. 日本公衆衛生雑誌 2005; 52: 746-755.
- 6) 日本公衆衛生学会「公衆衛生看護のあり方検討委員会」(委員長 金川克子). 日本公衆衛生学会「公衆衛生看護のあり方検討委員会」第1期・第2期報告書. 日本公衆衛生学会, 2005.
- 7) 峰村淳子, 中根洋子. 本校の「地域看護学実習」の成果と今後の課題. 東京医科大学看護専門学校紀要 2003; 13: 1-11.
- 8) 守田孝恵, 井上奈美. 臨地実習による学習内容の分析—これからの保健婦が備えるべき「4つの能力を中心に」—. 日本看護学会論文集第30回看護教育 1999; 133-135.
- 9) 関 美雪, 宮地文子, 中崎啓子, 他. 保健所・保健センター実習における学生の学び. 埼玉県立大学紀要 2003; 4: 151-154.
- 10) 山田洋子, 高屋順子, 井手成美, 他. 学士課程の地域看護学教育及び保健婦・士の業務研究への指導に対する保健婦・士の意見調査. 千葉大学看護学部紀要 2000; 22: 45-49.
- 11) 佐伯和子, 加藤欣子, 平野憲子, 他. 学士課程の地域看護学実習における「地域の看護アセスメント」の学習課題の必要性に関する実習指導者の認識. 北海道公衆衛生学雑誌 2001; 14: 158-164.
- 12) 若杉里実, 大須賀恵子, 白石知子, 他. 公衆衛生看護学実習における教育方法の検討—保健所実習での地区把握課題を市町村実習でどのように活かしたか—. 保健婦雑誌 2003; 59: 350-355.
- 13) 舟島なをみ. 看護教育学研究—発見・創造・証明の過程. 東京: 医学書院, 2002.
- 14) 舟島なをみ, 杉森みど里, 編著. 看護学教育評価論—質の高い自己点検・評価の実現—. 東京: 文光堂, 2000.
- 15) 中澤みな子, 原 厚子, 早川公子. 臨地実習指導者の指導姿勢—ほめる指導・関心度・自信度・負担度の関係—. 日本看護学会論文集第33回看護教育 2002; 3-5.
- 16) 金子美香子, 鈴木のり子, 菅野寿美子. 臨地実習指導者の指導に対する意識—やりがいと関心度, 自信度, 負担度の関係—. 日本看護学会論文集第36回看護教育 2005; 227-229.
- 17) 梶田 叡一. 教育評価 第2版. 東京: 有斐閣, 1992.
- 18) Polit DF, Hungler BP. Nursing Research: Principles and Methods 3rd eds., Philadelphia: Lippincott, 1987. (近藤潤子, 監訳. 押尾祥子, 他訳. 看護研究: 原理と方法. 東京: 医学書院, 1994.)
- 19) 杉森みど里, 舟島なをみ. 看護教育学 第4版. 東京: 医学書院, 2004.
- 20) 平澤敏子(神奈川県茅ヶ崎保健福祉事務所). 平成16年度地域保健総合推進事業—保健師学生の実習指導に関するあり方調査研究事業報告書—, 2005.